

アマルティア・セン、ジャン・ドレーズ著「開発なき成長の限界—現代インドの貧困・格差・社会的分断」明石書店 2015年12月15日刊を読む

なぜ教育は重要なのか

はじめに

(1) ラピンドラナート・タゴールは当時のインドの状況を鋭く分析したうえで、次のように述べている。

「インドの精神のうえに重くのしかかっている悲惨という壮大な塔は、その唯一の土台を教育の欠如に置いていると私は考えています」。

(2) インドが抱える数々の問題のなかから一つの要素だけを取り出しているという意味で、この発言はやや極端ではあるが、タゴールが示した見解は大変示唆に富んだものである

(3) 開発と社会的進歩の過程で基礎教育が果たす役割というのは、とても幅広くかつきわめて重要である。

1. 第一に、「読み書き」や「計算」の能力は生活の質に大きな影響を与える。

(1) つまり、そういった能力を身に付けることによって、世の中を理解し、しっかりとした情報に基づいて生活を送り、まわりの人たちとコミュニケーションをとり、現在起きている物事に幅広く目を向けるという自由が得られる。

(2) 社会では(特に、今の世の中では)、文字による意思疎通が重要な位置を占めているため、「読み書き」ができないということは牢屋に閉じ込められているようなものであり、そこから逃れるための扉を開いてくれるのが学校教育なのである。

2. 第二に、「経済的成功を手にする可能性や職を得られる見通し」というのは、教育を通して学んだ内容や習得した技能に大きく左右される。

(1) 「文字情報を理解」したり、「ある特定の作業にかかわる数字を追いかけてたりする能力」は、単純労働にも必要な適性とされることがあり、生産と流通で分業化が進んでいる現在では、このような傾向はさらに強まっている。

(2) また、世界規模で商取引が行われるなかで、教育の必要性はいちだんと高まってきており、中国のような国の経済的成功は、全世界へ向けて財・サービスを提供するために必要となる品質管理や技能形成といった条件を満たす、それなりに教育を受けた労働者の能力に負うところが大きい。

3. 第三に、「読み書き」の能力が広く社会に行き渡っていないと、「政治的要求を訴える声」が弱々しいものになるため、人々に十分な保護が与えられないような状況に直結してしまう。

(1)「政治的要求の声」と「安全」との間の関連性については、十分に認識されていないことが多い。

(2)とはいっても、多くの人々が「読み書き」できなくても、民主主義がしっかりと機能する可能性があることを否定しているのではない。

(3)むしろ、民主的権利は「読み書き」できない人たちにとっては使い道がないという、よく耳にするあまりにも時代錯誤の議論ではこの点は素通りされているため、確かに強調しておかなければならない。

(4)しかし、その一方で、「新聞、雑誌、本を読む能力」や「互いに意思疎通する能力」のような社会的エンパワーメントが政治的機会と結びつくことによって、人々が上げる民主的要求の声がより広い範囲に行き渡るようになるのもまた事実である。

(5)つまり、ここでのポイントは、民主主義がともかく機能しているかどうかということではなく、「読み書き」ができないために弱められていた人々の声が、不十分な学校教育によって口をふさがれているような状態から解き放たれた時に、民主主義がどれだけ機能するようになるのかということなのである。

4. 第四に、「保健」にかかわる問題全般、特に「公衆衛生」にかかわる問題に取り組むうえで、基礎教育は大きな役割を果たす。

(1)どのように伝染病は広まるのかとか、どのようにして病気を防ぐことができるのかといった点についての専門的な衛生教育が重要なのは、容易に理解できる。

(2)しかし、一人一人の「考える能力」を伸ばしたり、「疫学的問題」が発生した場合に大きな効果が得られるよう社会全体の判断力を養ったりすることは、「一般教育」によっても可能である。

(3)実際、専門的な衛生教育よりも、「一般教育」のほうが、健康な状態を保つのにより大きな効果があることを示す研究もある。

(4)また、予防接種、衛生管理、伝染病予防などに関する公衆衛生上の取り組みを行う際には、「学校教育」がその手助けとなることも多い。

5. 第五に、教育面での発展が重要な原動力となって、幅広く定義された人権と呼ばれるものが持つ広がりや奥行きに関して、人々の意識に変化がもたらされることがよくある。

(1)例えば、ケーララ州(さらに最近では、ヒマーチャル・プラデーシュ州)の教育面での発展は保健医療への需要を高める大きな要因となっており、その背景には、健康を保つことの重要性や保健関連の施設・サービスの提供に果たす社会の役割についてよりはっきりと認識されるようになったという点がある。

(2)「学校教育」と「読み書き」の能力が普及することで、何を人権と見なせるのかという点についての理解が、はるかに明瞭なものになる傾向にある(現在の世界的な人権意識のなかに、保健医療は確実に位置づけられているだろう)。

6. 第六に、法的権利を理解したり、実際に行使したりすることにも教育は影響を与える。

(1)法制化された権利をすでに手にしているかもしれないのに、市民がそれを活用できずにいるということが時としてある。

(2)「読み書き」ができなければ、自分に与えられている法的権利を理解し、それを実際に行使する能力が大きく制約されてしまう。

(3)女性の権利を実現するうえで、「読み書き」ができないことが最大の障害の一つとなっていたバングラデシュについて、サルマ・ショパンが何十年も前に明らかにしているように、この点は女性について特に当てはまる。

(4)「学校教育」を受けていなければ、恵まれない人たちは確立された法的権利の侵害に抵抗するための手段から引き離されるため、保護のない不安定な状態へとただちに追いやられてしまうのである。

7. 第七に、若い女性に学校教育を受けさせることで、家庭内での女性の発言力や決定権が大きく向上することが様々な証拠から明らかになっている。

(1)「家庭内での平等」が一般的に重要であるというだけでなく、「女性が発言力を持つこと」によって、その他にも数多くの社会的な変化がもたらされる。

(2)例えば、「女性のエンパワーメントが出生率を大きく引き下げる」という傾向は、詳しく検討すべき最も重要な点の一つである。

(3)とはいっても、これは驚くべきことではない。

(4)なぜなら、絶え間ない出産と育児によって最も大きな影響を受けるのは若い女性の生活であり、さらに、女性の発言力を高めたり、女性を取り巻く利害についての関心を高めたりすることであれば何であれ、あまりにも頻繁な出産に歯止めをかける傾向が全般的に見られるからである。

(5)さらに、女性が教育を受けて「読み書き」ができるようになると、子供の死亡率が低下する傾向が見られる。

(6)実際、多くの国々で女性の「識字」と子供の生存が密接に関連しているという証拠が数多く存在する。

8. 第八に、教育は階級に基づく障壁を突き破る万能薬ではないが、階級やカーストによる分断と結びついている不平等を緩和するうえで大きな役割を果たす。

階層化という現象はインドの経済開発と社会開発にとって依然として深刻な障害であり、教育の普及はこうしたインド社会の病根を取り除いていくための重要な手段の一つである。

9. そして最後に、学習環境がしっかりと整えられ、支援が行き届いているのであれば、学ぶということはとても愉快で創造性が刺激される活動である。

(1) さらに、「学校教育」から得られる長期的な便益とはまったく別に、「学校で教育を受けるという過程そのもの」が若者の生活の質を著しく向上させる。

(2) しかし、学校に通っている平均的なインドの子供たちにとっては、この点は自明のことではないだろう。

(3) なぜなら、こうした子供たちは、退屈で殺伐とした環境のなかで勉強していることがよくあるうえに、多くの場合、体罰を受けているかもしれないからである。

(4) とはいえ、大半の子供たちにとってみれば、学校へ通うということは、児童労働、家庭内労働、その他の仕事よりもずっと好ましいだけでなく、子供たち自身の生活を実り豊かで楽しいものにしてくれるのである。

おわりに

(1) 「基礎教育」が人間の暮らしに与える影響というのは容易にわかることであり、最も貧しい世帯であってもこの点はすぐに理解できる。

(2) インドでは、子供の教育(特に、女子の教育)に親が無関心だったり、さらには反対したりするという話をよく耳にするが、それとは対照的に、すべての子供に教育を受けさせることの重要性が、最も貧しい世帯の間でさえも当たり前のように認識されているのには驚かされる。

(3) この点は、1999年に公表された(「PROBE 報告書」として知られている)「基礎教育に関する公開報告書」、さらには、プラティチ財団などが行ったより最近の調査によって明らかにされた主な発見のうちの一つである。体系的に行われた実証研究によると、よくいわれているのは反対に、手の届く範囲の費用でしっかりと(そして、安全な)教育機会が家の近所で提供されているのであれば、親が(娘であろうが息子であろうが)子供を学校に通わせることを非常に嫌がるという傾向はまったく見られない。

(4) そして、子供を学校に通わせることに親があまり乗り気でない場合には、学校を取り巻く環境に問題があることが多い。例えば、両親が働いている場所からかなり離れたところに学校が位置しているとか、学校には先生が一人しかおらず、その先生も出勤しない日があるかもしれないような場合、子供(特に女子)の身の安全に不安があることなどが理由として挙げられる。

P.171 ~ 175

<コメント>

子供を含むすべての人々の貧困と機会の格差是正をどう考えるか、インドについてのアマルティア・セン先生の考察は、日本人にとっても、また、世界の人々にとっても示唆に富む。大著ではあるが、少しずつ読めばものごとの本質がよく理解できる極めてわかりやすい好著。是非、御一読を。

— 2016 年 3 月 10 日 (木) 林 明夫記 —